

「群馬の中学生 英語4技能スキルアップ事業（県教委指定）」

「西部地区小中一貫外国語（英語）教育充実事業（西部教育事務所指定）」

研究主題

自分の夢や考えを英語で生き生きと伝え合うことができる生徒の育成

～9年間の学びのつながりを踏まえ

4技能をバランスよく育む単元・授業づくりを通して～

研究の成果（○）と課題（●）

藤岡市立小野中学校

本校は平成30年度より3年間、「群馬の中学生 英語4技能スキルアップ事業（県教委）」、並びに「西部地区小中一貫外国語（英語）教育充実事業（西部教育事務所）」の指定を受け、研究に取り組んできた。

また、平成26年度より小中一貫教育をスタートさせ、「小野の英語」（教科指導の重点）に基づき、小中で目指す子どもの姿を明確にして授業を行ったり、本校英語科教員が小学校外国語活動の指導を兼務したりするなど、9年間の学びのつながりを大切にした実践を重ねてきた。本年度は1名の英語科教員が、小学校6年生の外国語を担当している。

このような取組を基盤として、小野連携型小中一貫校として、4技能をバランスよく育成する英語指導の在り方を明らかにし、生徒の英語によるコミュニケーション能力の向上を目指している。

1. 英語科における目指す子ども像

小野連携型小中一貫校の共有する子ども像として、「夢に向かってかがやく子」を掲げ、小野中学校では「学びをもとに、主体的に判断・表現できる生徒」を目指した学校づくりに取り組んできた。小中共通の外国語活動・英語科の指導の重点である「相手を意識して自分の考えをわかりやすく英語で話し、相手の話を興味をもって聞くことができる子」を踏まえ、中学校段階における目指す子ども像として「身に付けた語彙や文を適切に用いて、自分の夢や考えを英語で生き生きと伝え合うことができる生徒」を掲げ、4技能をバランスよく育成するための授業改善を進めてきた。

2. 基本的な考え方

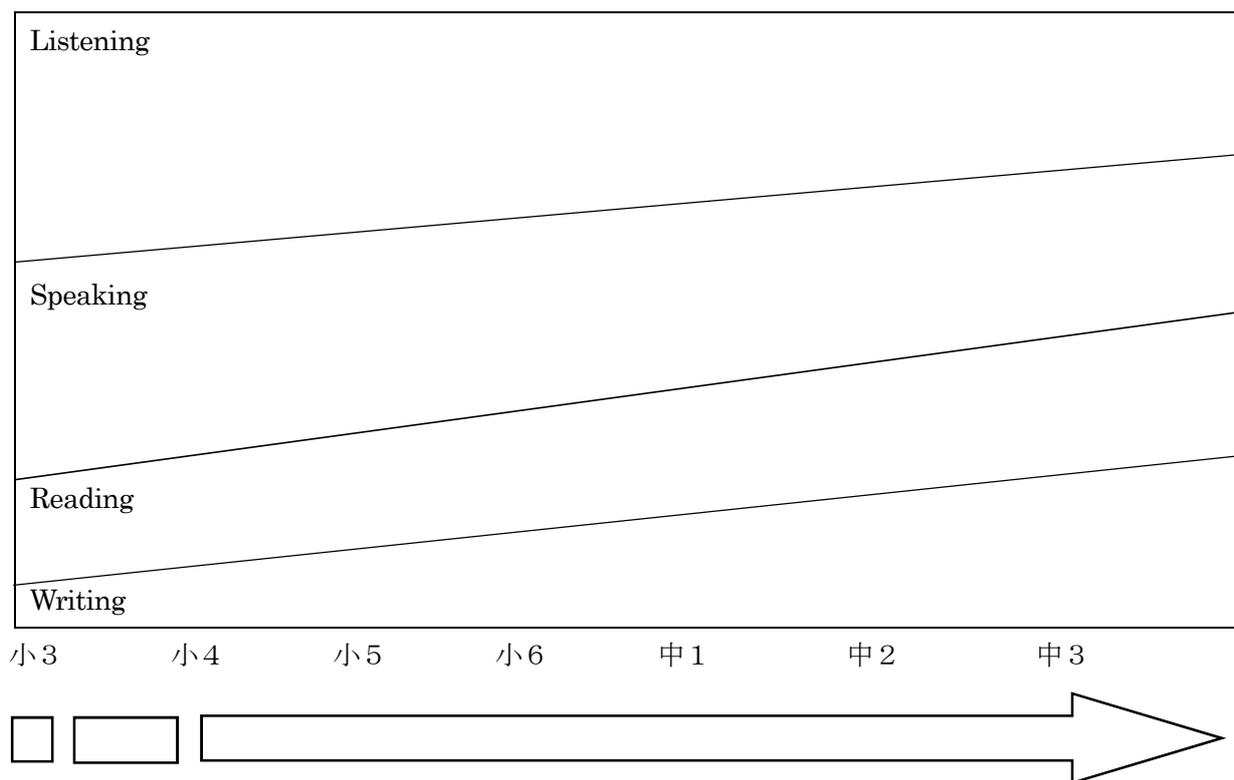
藤岡市では、文部科学省への特例校申請により、小学校1年生から外国語活動の時間を設けている。（1年生年間14時間、2年生15時間を教育課程に位置づけている。）小学校では令和2年度より新学習指導要領実施となり、3・4年生で年間週35時間の外国語活動、5・6年生では年間70時間の外国語の時間を実施している。

低学年で外国語にふれる楽しさを味わわせ、中学年では **speaking** や **listening** を中心に慣れ親しませる。そして高学年では、**writing** や **reading** にもふれられるよう学習内容を設定している。

中学校1年生では、小学校からのつながりを大切にして、**speaking** や **listening** に重きをおきながら **writing** や **reading** にも本格的に取り組むようになり、2年生、3年生と、学年が上がるにつれて4技能をバランスよく育成していくことになる。

同一単元の中で4技能を意識した言語活動を設定するが、年間、中学校3年間、小中学校9年間など様々なスパンで4技能のバランスのとれた授業づくりを進めている。

4技能育成のイメージを図に表すと、次のようになる。



*小1・小2については、**Listening・Speaking** を中心に授業を行う。

3. 具体的な取組

「身に付けた語彙や文を適切に用いて、自分の思いや考えを英語で伝え合うことができる生徒」を目指し、4技能をバランスよく育成するために、次の5つの取組を中心にして、授業改善を進めてきた。

(1) 英語による英語授業の実施

ALT とのチームティーチングでは9割、通常授業では8割を英語で行い、生徒が英語に慣れ親しみ、英語によるコミュニケーション能力の基礎を養い、教師と生徒が、生徒同士が英語でコミュニケーションし合える授業を目指してきた。

○授業において教師のコミュニケーションの手段としての英語使用が増えたり、言語活動が充実し

たりしていることにより、生徒が英語でコミュニケーションを図ろうとする意欲が高まり、自己表現の力が高まった。

- 言語活動の場面では JTE、ALT とともに生徒の中に入り、生徒一人一人の思いを引き出したり、褒めたり認めたりすることができた。
- 英語の授業外（休み時間など）でも、挨拶だけでなく日常的な話題などについて授業で学んだ既習表現を使いながら、楽しそうに英語で話す生徒が増えた。
- 授業を実際のコミュニケーションの場とするためにもオールイングリッシュで授業ができるようにしたい。そのために、生徒の理解の程度に応じた英語を用い、特に苦手意識を感じている生徒も理解できるような英語使用の工夫をしていく。
- 言語活動において生徒のやり取りの正確性を見取るなど、評価力の向上が必要である。今後はタブレットを活用して会話を録音し、単元の初めと終わりでどのようにコミュニケーション力が向上したかを見取るなど、ICT 活用を進めていきたい。

(2) 「つかむ」「追究する」「まとめる」過程を明確にした単元構想の作成

「はばたく群馬の指導プランⅡ」の P.134 で示されている「単元のつくり方」による単元構想に取り組んできた。「つかむ」過程では、単元の課題を示すとともに、課題解決に向けた学習の見通しをもたせる。「追究する」過程では、言語活動を通して新出言語材料を習得、活用させたり、教科書の本文理解に関する活動に取り組ませたりする。「まとめる」過程では、思いや考えを伝え合う活動に取り組ませ、単元を通じて言えたことやできるようになったことを自覚させるようにしている。

- 新しい単元の課題を「つかむ」場面で既習表現を用いて「試しの活動」に取り組ませることで、これまでの学習と新しい単元での学びのつながりを意識させ、「追究する」「まとめる」過程への意欲をもたせることができた。
- 「試しの活動」と単元末の「まとめる」活動を比べ、できるようになったことについて振り返らせることにより、生徒に達成感や成就感を味わわせることができた。
- 単元末に、生徒の学習意欲を高める単元のゴールを設定することで、主体的に学習に取り組む態度を育てることができた。
- 単元構想の充実には、生徒がこれまで（小中学校で）何をどのように学習してきたかを十分把握することが必要不可欠である。小中学校の兼務教員が中心となって情報交換をさらに密にして、「系統表」を活用し全学年に渡って学びのつながりを踏まえた単元構想ができるよう取り組んでいく。

(3) Show & Tell による、4 技能を統合した授業づくりの実施

小学校3年生から中学校3年生までの7年間、系統的、計画的（1年間に数回）な Show & Tell を実施し、児童生徒が見せたいものや伝えたいことを、自分の思いや考えを交えて紹介する活動を積み重ねる。中学年では speaking や listening を中心にコミュニケーションを楽しみ、高学年から中学校

へ進んでメモや原稿を書いたり（writing）、互いに読み合ったり（reading）、中学校3年生ではプレゼンテーションにも挑戦する等、児童生徒の発達段階に応じたカリキュラムを作成し、系統的に、4技能のバランスがとれた英語力の向上を目指してきた。

○話す（Speaking）活動を中心に、他の技能（Listening, Writing, Reading）とうまく統合させたことにより、4技能のバランスがとれた英語力の育成につながった。

○「何のために」とともに「誰のために」を意識した Show and Tell 活動を行ったことで、生徒は他者意識をもって話す技能が身に付いてきた。

○目的や場面、状況等に応じて情報を加えて話し続ける活動を行うことで、正確なやりとりができるようになり、コミュニケーションへの意欲が一層高まった。そして、その活動を行うためにメモや原稿を書き（writing）、教科書の文を参考にしたりお互いに読み合ったり（reading）する学習活動に対する必要感が高まり、充実させることができた。

○Show and Tell を小中一貫校としての中心となる言語活動として設定することで、目指す子ども像である「夢に向かってかがやく子」につながる「英語で自分の夢を生き生きと語る生徒の育成」を図ることが達成できた。

●4技能をスキルアップさせることができたが、話し手の内容を聞いて、さらに質問をしたり、自分の考えを伝えたりするなど、聞くこと（Listening）からさらに内容を発展させることができるような力を高めていく必要がある。

●やりとりや発表を聞きながら内容をチェックするワークシートの活用によって聞き手としての視点をもつきっかけを与えることはできたが、「聞く視点」を日常的にもたせることで第3者としてやりとりに加わったり、積極的な質問・アドバイスを行ったりするなど、より活発なコミュニケーションの場を増やしていきたい。

（4）「Show & Tell」を軸としたパフォーマンステストの実施と「Show & Tell・パフォーマンステスト系統表」の作成

英語4技能のスキルアップの評価として、Show & Tell を発展させたパフォーマンステストを実施している。各学年の児童生徒の発達段階に応じた内容および実施方法等を検討し、実態に応じた内容や方法で実施する。小学校5・6年生に外国語科が導入されたことに伴い、小学校5年生から中学校3年生までを対象とし、学期に1回程度のパフォーマンステストを計画して実施している。一昨年度、県義務教育課ALTを講師に招き、パフォーマンステストに係る研修会を実施し、指導力（評価力）の向上を図った。また、Show & Tell とパフォーマンステストの効果的な取組を図るため、「Show & Tell・パフォーマンステスト系統表」を作成して実践している。

さらに、Show & Tell の様子をビデオ等で記録に残し、上級生の Show & Tell をモデルとして視聴させることにより学びのイメージをもたせる。それにより、目指す姿が明らかになり、Show & Tell の活動に主体的に取り組む態度を養ってきた。

- 前単元の **Show and Tell** で作成した成果物やキャリアパスポートを「つなぎ教材」として使用する場面を意図的に設定したことで、生徒は小中学校の学びの連続性や単元のつながりを意識するようになり、当時の自分の思いを確認したり、既習事項を想起したりしながら言語活動を行う生徒が増えた。
- Show and Tell** を軸としたパフォーマンステストを単元のゴールとして設定することで、逆算的な単元構想が可能となり、見通しをもった授業づくりができるようになった。
- 単元末のパフォーマンステストに向けてやり取りや教科書本文などから参考になる表現をマッピングに加えたり、言えたことを書きためたりするなど、英語学習への積極的な態度を育てることができた。
- 録画した中学生の **Show and Tell** を小学生に視聴させることで、先輩へのあこがれや学びの連続性を感じさせ、英語学習への意欲を高めることができた。
- Show and Tell** を単元末のパフォーマンステストの軸として用いてきたが、単元の途中でも登場人物を説明するなど、簡単な **Show and Tell** を積み重ねることでより日常的で流ちょうな話し方ややりとりができるよう指導していきたい。
- 授業中に学習した内容についてリテリングをする活動も **Show and Tell** の練習として有効であるため、計画的に取り入れていきたい。

(5) Greetings から Interaction につなげる帯活動の実施

毎時間、授業の最初にあいさつ等のやりとりを交わすが、その内容が児童生徒の発達段階に応じたものとなるように、系統的に実施している。具体的には、小学校低学年では、挨拶（気分も含む）を中心に、中学年では挨拶に加えて、日付、曜日、天候等を取り上げる。高学年から中学校に進むにしたがって、おきまりのやりとりだけでなく、日常生活や身近なこと（例 好きなこと、朝食や夕食で食べたもの、週末のできごと等）について児童生徒の実態に応じて興味・関心のある話題、単元や本時のねらいと関連した内容に応じた話題について対話的な言語活動ができるようにしている。

- 単元の内容と関連を図り、生徒の実態に応じたトピックを題材に **Small Talk** を帯活動として実施することで、単元の内容と生徒の「伝えたい」思いをつなぎ、生徒同士のやりとりを充実させることができた。
- Small Talk** のテーマを工夫し、前時までに学習した言語材料を使用できる機会を充実させ、言語面における正確性を高めたり、会話の内容面の豊かさを確認しながら、新たな表現に出会わせたりすることができた。
- 帯活動のトピックが日常的なものに偏ってしまったので、ALT が興味のある日本文化や日本での生活で疑問に思っていることなども取り上げることで内容の一層の充実を図っていきたい。

4. 研究の沿革

<p>1年次 (平成30年度)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○研究体制の確立 ○4技能を統合した授業づくりの実施 ○ Show & Tell の活動を生かしたカリキュラムの作成 ○パフォーマンステストの実施 	<p>○研究授業発表会（中学校）</p>
<p>2年次 (令和元年度)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○4技能を統合した授業づくりの検証・改善 ○ Show & Tell の活動を生かしたカリキュラムの実践・改善 ○パフォーマンステストの改善 ○「Show & Tell・パフォーマンステスト系統表」の作成・活用 	<p>○研究授業発表会（中学校）</p>
<p>3年次 (令和2年度)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○4技能を統合した授業モデルの確立 ○ Show & Tell の活動を生かしたカリキュラムの確立 ○パフォーマンステストの研究 ○「Show & Tell・パフォーマンステスト系統表」の活用・改善 ○研究成果のまとめ 	<p>○研究授業発表会（中学校）</p>